

# 文化人類学 レジюмеと参考文献

## 1 文化人類学的視点—自文化中心主義への批判

### 1-1 文化人類学（社会人類学、民族学）

- 異文化の解説、異文化の翻訳

### 1-2 文化とは：

- 生活様式の体系 = 一定のモノの見方、考え方に基づいた生活全体
- 無意識レベルにまでしみこむ常識となる

### 1-3 自文化中心主義を批判する

- 自文化中心主義とは：無意識のうちに自分の文化的フィルターを通して異文化を見てしまうこと

### 1-4：「嬰兒殺し」と言われた事例

- 生まれたばかりの赤ん坊を「殺す」社会での出来事。
- その社会では、赤ん坊は、名前が付けられて初めて「人間」と認定される。
- 名前がつくまでの赤ん坊は、母親のおなかの中にいる状態と同じ扱い。

## 参考文献

合田濤編 『現代社会人類学』弘文堂

綾部恒雄編 『文化人類学 最新述語100』弘文堂

山下晋司・船曳建夫編 『文化人類学キーワード』有斐閣双書

## 2 進化主義と文化相対主義

### 2-1 進化主義

○ヒューマニスティックな視点：人間である以上は、すべての社会が同じように進化・発展する能力を持っているという前提

↓

すべての社会は同じ進化の道筋をたどる

↓

西洋的な進化・発展の道筋がすべての社会に適用できる

↓

自文化中心主義的な視点

○モーガンの進化論： 野蛮→未開→文明

○西洋的な進化・発展の道筋 = テクノロジー中心の文化観 = 非西洋世界と異なる

### 2-2 文化相対主義

○普遍主義に対する相対主義

○ヘルダーの相対主義：18c末

あらゆる文化共同体に、それぞれ固有で独自の価値を認めるべき

○普遍主義的なフランスの視点に対して、ドイツにはドイツ独自の視点があると主張

○ヘルダーの相対主義の問題点：自文化を語っている。自文化を異文化から区別するため自らの独自性を主張 → 我々は彼らと違う → 排他的な視点を作り出す → 我々だけ他とは異なる、という排他的で優越的な視点の芽を生み出す → 自文化中心主義的相対主義

○ボアズの文化相対主義：20c初頭

すべての文化は、それ自身の論理と用語で考えられねばならない。

○ヘルダーの相対主義とほとんど変わらない

○しかし、異文化を語ろうとする努力→自文化中心主義からの離脱の試み  
→ 自文化中心主義的ではない相対主義

### 参考文献

青木保 『多文化世界』岩波新書

綾部恒雄編 『文化人類学 20 の理論』弘文堂

綾部恒雄編 『文化人類学 15 の理論』中公新書

山下晋司編 『文化人類学入門』弘文堂

C. ギアツ 『解釈人類学と反=反相対主義』みすず書房

L.H.モルガン 『古代社会』岩波文庫

### 3 テレビにおける異文化表象の嘘

#### 3-1 フィールドワーク

- 太平洋における三つのネシア
  - ミクロネシア、メラネシア、ポリネシア
  - サンゴ礁島、火山島、陸島
- 曖昧な人種：コーカソイド、モンゴロイド、ネグロイド

#### 3-2 イメージの太平洋

- キリスト教徒のいる文明化していくポリネシア
- 宣教師をも殺して食べてしまう食人種のいるメラネシア
- 秘境と楽園

#### 3-3 日本のテレビにおける異文化表象

- ヴァヌアツ共和国
  - 1980年、イギリスとフランスの共同統治から独立
  - 人口25万人、首都ポート・ヴィラ
  - 100程度の異なる言語の存在
- ヴァラエティー番組における異文化の描き方
  - 極端な場合：我々を「文明」、彼らを「未開」として対比
  - 王道：我々と彼らの差異の強調→我々の側の戸惑い→我々と彼らの交流→我々と彼らの共通性の発見、あるいは、彼らの中に我々が失ってしまった真の人間性を発見
- ドキュメンタリー番組における異文化の描き方
- テレビ語：テレビ語＝番組を作品として面白いものにするための演出
  - ↓
  - 別の文脈の映像の挿入、「台詞」の訳の差し替え
  - ↓
  - 作品としての筋の通った物語の創造

#### 参考文献

- 飯田卓、原知章編 『電子メディアを飼いならす』せりか書房  
吉岡政徳、石森大知編 『南太平洋を知るための58章』明石書店

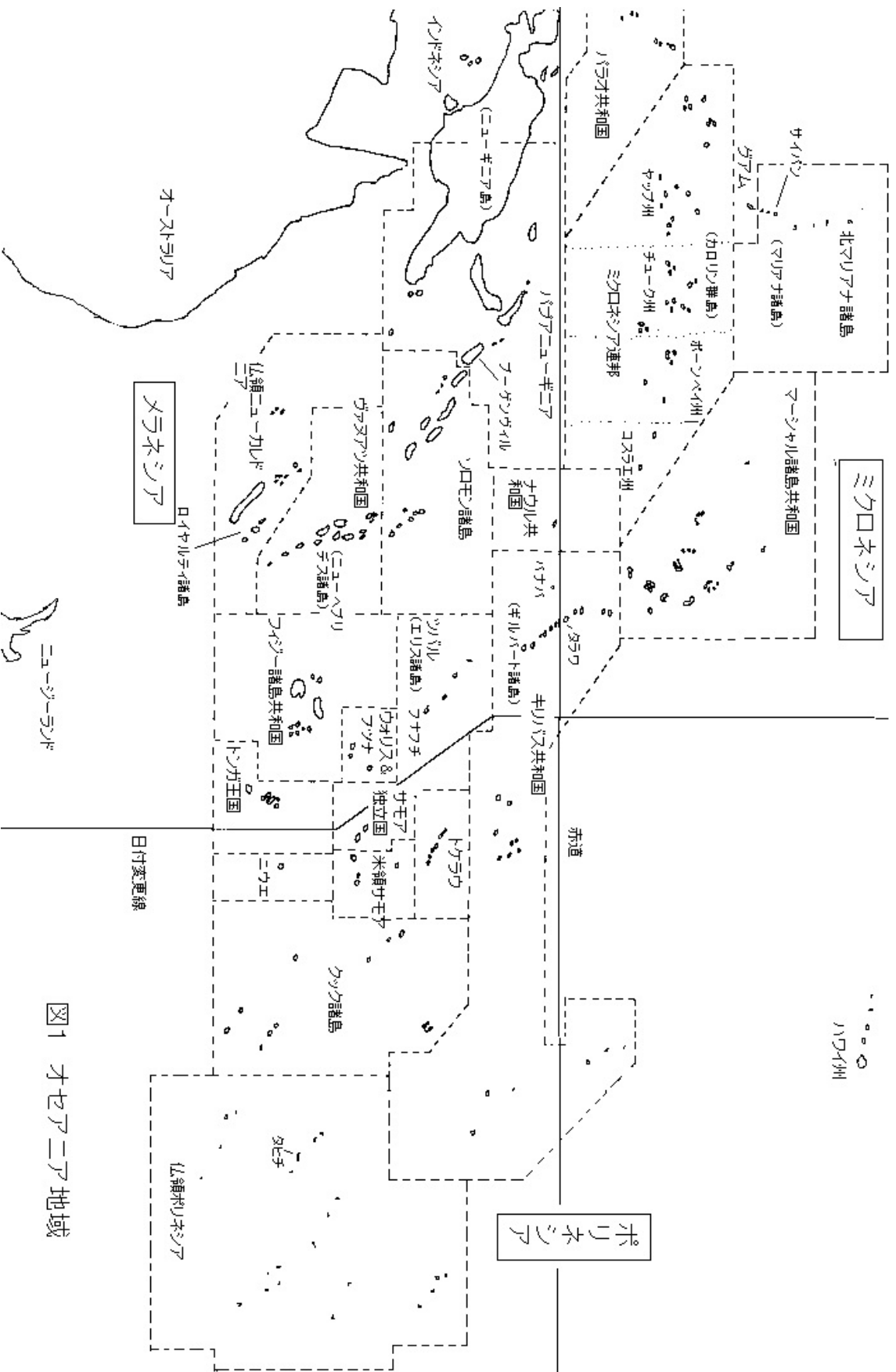


図1 オセアニア地域

## 4 多様な社会：父系と母系

4-1 キンドレッド：個人を中心として父方母方両方に広がる血縁集団（日本における親類，親戚に類似）

4-2 出自集団：祖先から一定の出自にしたがって descent してきた人々によって構成される親族集団。

○出自

父系出自：祖先から男だけをたどって descent するやり方。

母系出自：祖先から女だけをたどって descent するやり方。

双系出自：祖先から男でも女でもどちらかをたどって descent するやり方。

4-3 父系社会

○父系出自だけを親族集団の構成原理とする社会

○帰属の点でいえば、父と子は同じ新族集団の成員、母はよそ者

○日本の「家」は「父系的」

○父系社会における権利、権力

○父系＝父権＝男権

○財産相続、地位の継承 父→息子

4-4 母系社会

○母系出自だけを親族集団の構成原理とする社会

○母と子は同じ新族集団の成員、父はよそ者

○母系社会における権利、権力

○母系≠母権、母系＝男権

○財産相続、地位の継承 母方オジ→姉妹の息子

### 参考文献

村武精一編 『家族と親族』 未来社

R. キーピング 『親族集団と社会構造』 未来社

## 5 いびつな母系家族

- 5-1 地縁集団：結婚後の居住のあり方によってきまる。
- 夫方居住：結婚に際して妻は夫の生まれ育ったところに移り住む→父系的な結びつきを持つ男たちとその配偶者たちが同じところに居住する結果となる。
  - 妻方居住：結婚に際して夫は妻の生まれ育ったところに移り住む→母系的な結びつきを持つ女たちとその配偶者たちが同じところに居住する結果となる。
  - 新居居住：夫も妻も、自らの生まれ育ったところとは違うところで結婚後の生活を行う。→ 結束力のある地縁集団が生まれるわけではない。
- 5-2 出自と居住の組み合わせ
- 父系+夫方居住：互いに親族関係を持つ男たちが、同じところに居住するという結果になる→結束力の非常に強い集団が形成される。
  - 父系+妻方居住：親族集団の成員がバラバラのところに居住する→結束力のある集団をつくることはできない。
  - 母系+夫方居住：親族集団の成員がバラバラのところに居住する→結束力のある集団をつくることはできない。
  - 母系+妻方居住：互いに親族関係を持つ女たちが、同じところに居住するという結果になる→人類の社会：集団づくりにおいて男性が優位、女性が劣位→ある程度結束力のある集団づくりが行われるが、非常に強いわけではない→母系社会にあって、互いに親族関係を持つ男たちを同じところに居住するための工夫 →オジ方—夫方居住
- 5-2 オジ方—夫方居住
- 男子は一定年齢になると、父母の集落を離れて母方のオジの集落に移り住む。その後、終生そこで過ごす。結婚するときには、夫方居住に基づいて、妻を他の集落から連れてくる。
- 5-3 母系+オジ方—夫方居住による母系家族の変遷
- 男性自己+母方オジ夫婦+母方オジ夫婦の娘 → 男性自己+自己の妻+母方オジ夫婦 → 男性自己+自己の妻+自己の娘+自己の姉妹の息子+母方オジ夫婦 → 男性自己+自己の妻+自己の姉妹の息子+その妻+（母方オジ夫婦）

### 参考文献

- 須藤健一 『母系社会の構造』 紀伊国屋書店  
吉岡政徳 『メラネシアの位階階梯制社会』 風響社  
B.マリノフスキー 『性・家族・社会』 人文書院  
B.マリノフスキー 『西太平洋の遠洋航海者』 講談社学術文庫

## 6 成り上がる政治的リーダー：ビッグマン

### 6-1 メラネシアとピジン語

- 混成語：ピジンとクレオール
  - ピジン：それを母語とする者が存在しないような混成語
  - クレオール：それを母語とする者がいるような混成語
- メラネシアでのピジン語の名称
  - パプアニューギニア：トク・ピシン
  - ソロモン諸島：ピジン、
  - ヴァヌアツ共和国：ビスラマ

### 6-2 メラネシアの伝統的政治リーダー

- ビッグマンへの道：余剰生産物を産出する → 財と交換し、財を蓄積する → 財を贈与する → 贈与した相手の負債感を利用して、政治的発言の支持を取り付ける → 自らの支持者を増やす
- モースの『贈与論』：贈与における三つの義務：贈る義務・受け取る義務・返礼の義務
- 贈与交換の仕組み：より多く与えた方が社会的地位があがる
- 贈与交換と商品交換
  - 贈与交換：交換される物には価値は置かれず、交換する者同士の間関係が重要
  - 商品交換：交換される物が重要であり、交換する者同士の間関係は重要ではない。
- 経済的不平等を政治的不平等に変換することによりリーダーとなる。

### 6-3 ビッグマンの活動

- ビッグマンになった男は、自らの支持者を確保し続けなければならない。
- 常に支持者をつなぎとめておくために、何らかの利益を支持者に与え続ける必要がある
- 個人的能力をフルに発揮して、利益を与え続ける
  - 利益の例：財を贈与する、紛争を解決する、便宜を図る など

## 参考文献

- 須藤健一、秋道智彌、崎山理編 『オセアニア2 伝統に生きる』東京大学出版会  
M.サーリンズ 『部族民』鹿島出版会  
M.サーリンズ 『石器時代の経済学』法政大学出版  
M.モース 『贈与論』筑摩学芸文庫

## 7 階層の頂点に立つ首長、王

### 7-1 ポリネシアの首長制

- 親族集団の序列化：直系>傍系（長男は次男以下より序列が高い）を基準に。
- 第1位の親族集団から政治的リーダー（首長）が輩出。序列の順番に、貴族階層、平民階層が決まる。
- 首長の地位：生得的、世襲的、officeとしての性質（獲得的、被世襲的、officeではないビッグマンの地位と対比）
- 首長制社会における財の流れ：再分配
- ポラニーのいう人類の経済統合の原理
  - 互酬性：対称的な集団間の相対する点の間の財の移動
  - 再分配：ある集団内において財がいったん中央に向かい、そこから再び出てくる財の移動
  - 交換：利潤動機に基づく人と人における財の可逆的な移動
- 差異化の仕組み：首長を他の者から差異化する仕組み：例 タブー制度

### 7-2 アフリカの王国

- アンコーレ王国：王、貴族層＝バヒマ（牧畜民）、平民層＝バイル（農耕民）という階層構造
- 聖王という概念：王の身体が国土を表すため、王が病気などでその身体が弱っていくと、国土が次第に滅びると考えられた。そのため、王の身体が弱り切る前に、殺された。→ 差異化の仕組みの一つ

### 参考文献

M.サーリンズ 『部族民』 鹿島出版会

M.フォーテス、E.エヴァンズ＝プリチャード編 『アフリカの伝統的政治体系』 みすず

K.ポラニー 『人間の経済』 岩波書店



## 8 質問と中間のレポート試験

- これまでの授業に関する質疑応答。および、持ち込み可のレポート試験
- 持ち込み可の範囲：ノート、本、それらのコピー、シラバスのコピー（ネットは不可）
- レポート試験：一定の時間内に、黒板に書いた課題にたいする解答を、一定の量以上書くこと。

## 9 儀礼

### 9-1 儀礼の種類

- 通過儀礼：社会的地位が移り変わる節目を通過する時に行われる儀礼  
代表例：人生儀礼
- 強化儀礼：人間の福利を強化するための儀礼、自然の力を超自然的力に頼って人間に有利になるようにコントロールするための儀礼  
代表例 雨乞いの儀礼
- 状況儀礼：危機的状況に陥れたりそこから救済したりするための儀礼  
代表例：治療儀礼（加持祈祷 etc）、反治療儀礼（丑の刻参り etc）

### 9-2 通過儀礼における三つの局面

- 分離：これまでの社会的地位からの分離：新しい儀礼場の使用などで表される
- 移行：社会的地位の移行：主人公は「裸」「何も身につけていない」状態になる
- 統合：新しい社会的地位への統合：共飲共食の場面で表される

### 9-3 儀礼の登場人物

- 霊媒：靈的世界（超自然的世界）と交信する（その意思を聞く）能力があるとされる者

## 参考文献

白川千尋、川田牧人編 『呪術の人類学』人文書院  
関一敏、大塚和夫編 『宗教人類学入門』弘文堂  
ファン・ヘネップ 『通過儀礼』岩波文庫

## 10 儀礼の論理

### 10-1 スリランカのバリ儀礼（治療儀礼）

- テンカンに似た症状や発作を伴う病気（原因は、悪霊に取りつかれたこと）を治療する。
- 儀礼的な「悪霊払い」＝ 悪霊と格闘する聖職者というイメージとはことなる
- エクソシスト的な悪霊払いは、儀礼的ではない
- 儀礼的な思考：儀礼で行っていることが、並行関係によって現実にも生じると想定する 例：丑の刻参り

### 10-2 ザンビアのイソマ儀礼（治療儀礼）

- 母系で夫方居住をとる社会における治療儀礼
- 産婦人科的変調を治療する儀礼
- 病気の原因：親族を大事にしないから親族の誰かが小川の水源の近くで妖術をかけ、親族の女性祖先の亡霊を取りつかせたから。
- 母系の親族関係と、夫方居住に基づく婚姻関係の葛藤を論理的に示した儀礼
- 豊富なシンボルを使った儀礼

### 10-3 技術的行為と表限的行為

- 技術的行為：対象に対して物理的、化学的力を直接与える行為
- 表現的行為：対象に対して間接的な力が作用すると想定して行う行為。
- 「技術的行為：表現的行為：：文明：未開」ではない。

## 参考文献

青木保 『儀礼の象徴性』岩波現代文庫

E.リーチ 『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店

V.ターナー 『儀礼の過程』新思索社

## 1 1 未開観の変遷：進化主義的見方への批判

### 1 1 - 1 「未開」概念と「発展途上国」概念の類似

- 「未開」は開かれたら「文明」に至る、「発展途上国」は発展したら「先進国」へと至る。
- 先進国はかつては文明と自認していたところであり、発展途上国は、植民地化される以前は未開と呼ばれていた。

### 1 1 - 2 レヴィ＝ブリュールの視点

- 未開社会をヨーロッパの視点から考えてはいけない。未開社会には未開社会独自の論理がある → 文化相対主義的視点
- 違いを強調したあまり、未開＝非論理的、原始宗教的、文明＝論理的、科学的と位置づけ、結果として、当時の進化主義の結論と同じ視点を持つことになってしまった。

### 1 1 - 3 進化主義において考えら得た「原始宗教」

- アニミズム：すべてのモノに靈魂が宿るという信仰
  - タイラーの進化論：アニミズム→自然の精霊信仰→多神教→一神教
- トーテミズム：人間は動物や植物から生まれて来たと考える信仰
  - トーテム：人間集団と特殊な関係(祖先)と考えら得ている動植物。

### 1 1 - 4 デュルケームの視点

- (原始宗教も含めた)宗教的思考は、常識的思考とは異なる。しかし、科学的思考は、宗教的思考に近い。
- 科学的思考も宗教的思考も、説明のための論理を持っている。
- レヴィ＝ブリュールの論点からの転換
- トーテムは、集団を表す旗印であると考え。原始宗教としてのトーテミズムから分類体系としてのトーテミズムへの転換

## 参考文献

- 村武精一 『アニミズムの世界』 吉川弘文館  
E.デュルケム 『宗教生活の原初形態』 岩波文庫  
L.レヴィ＝ブリュール 『未開社会の思惟』 岩波文庫

## 1 2 レヴィ=ストロースと「野生の思考」

### 1 2-1 今日のトーテミズム

- あまたある動植物のなかから、なぜ特定のモノが集団のトーテムとして選ばれるのか？ それは「考えるのに適している」から。
- オーストラリアン・アボリジニのある社会の事例：社会全体が二つの集団に分かれており、それぞれタカとカラスをトーテムとしている。なぜ、タカとカラスがトーテムとして選ばれたのか？
- タカもカラスの大型の肉食のトリという点で、他の動物から区別される。しかも、タカとカラスは獲物の捕獲という点で対照的な違いを見せる。集団の違いなどを表すのに適している。
- レヴィ=ストロースのトーテミズム論  
動物や植物で出来た特殊な用語を用いて、違った風にも形式化でき対立や相関関係を、それなりに表しているにすぎない。

### 1 2-2 野生の思考

- 野生の思考は、人類に普遍的な思考。ただし、地球の歴史で言えばごく最近、一部の地域で「栽培化された思考」が登場してきた。これが「科学的思考」
- 「文明」社会は科学的思考で特徴づけられていると考えられてきたが、その奥には、人類に普遍的な「野生の思考」が存在している。
- 「未開」社会には科学的思考がないとされてきたので、「野生の思考」だけになりたっているということになる。つまり、「野生の思考」は「未開の思考」であり、進化論で言われてきた「呪術的で神話的な思考」ということになる。
- デュルケームの議論の解決
  - 科学的思考と（原始）宗教的思考は似ているとするが、どのように同じでどのように異なるのかの議論はしていない。
  - 野生の思考（呪術的、神話的、原始宗教的思考）は、（1）全面的で包括的な因果性を認める、（2）ブリコラージュ（器用仕事）を用いる、という特徴
  - 栽培化された思考（科学的思考）は、（1）一部についてだけしか因果性を認めない、（2）科学を用いる、という特徴。
- ブリコラージュと科学の違い
  - ブリコラージュは、日曜大工的。手じかにある有り合わせの材料をもちいて目的のものを作る。材料が限られているので、同じ材料をなんども組みかえる。一見して、何ができたか分からないが、モノとしては役にたつモノができる。
  - 科学は、工場生産。豊富な材料を用いて、各部品を組み合わせることで製品を作り出す。一見して、何が出来上がったのかわかる。

### 参考文献

- C.レヴィ=ストロース 『今日のトーテミズム』 みすず書房
- C.レヴィ=ストロース 『野生の思考』 みすず書房

## 1 3 植民地化と独立：「未開社会」から「途上国」への移行

### 1 3 - 1 植民地化

- 列強による恣意的な植民地の分割 → 民族単位の分断
- 植民地化した側の論理が植民地化された側に浸透
  - ヴァヌアツ共和国の例：イギリスとフランスの共同統治→全てのものがイギリス系とフランス系の分離→政党活動もイギリス系政党とフランス系政党に分離
  - イギリスの植民地政策を反映して、イギリス系政党は「早期の独立」を主張。フランスの植民地政策を反映して、フランス系政党は「白人との共存、社会の成熟を待って独立」と主張

### 1 3 - 2 独立運動

- 恣意的に設定された植民地の境界線を守ったまま独立を目指す → 少数民族となった人々が、多数派の主導する独立運動に反発 → 独立運動とは別に分離活動が展開される → 多数派によって鎮圧される → 独立 → 不満が残り、独立後の混乱、内乱状態へ
- 独立は、植民地単位で行われるが、民族単位で行われるわけではない。
- なぜ、列強が創りだした恣意的な境界線を守ったまま独立を目指すのか？

### 1 3 - 3 独立の指導者

- 独立運動を指導するのは、植民地のエリート（高度な学校教育を受け、海外にまで留学したエリート）
- 首都巡礼：エリート達は、最終的に首都の高等教育機関に集まる。
- ヴァヌアツ独立運動の指導者の回顧録より
  - ニュージーランドの神学校に留学。そこで様々な神学、哲学を徹底的に勉強 → 自分の故郷である太平洋、メラネシアについての言及がないことに気づく → 西洋的な教育・知識を身につけることで、「彼ら＝西洋」の世界と「我々」の世界は全く違うことを実感 → 違うものに支配されている理不尽さ、自分たちの手による国づくりを考える
- エリートの発見した「我々」 = 同じ植民地で生活している人々全体
  - = 植民地人民族
  - = 本来、文化的、言語的、民族的に結びつきがないにもかかわらず、同じ植民地に含まれているということで、あたかも単一の民族であるかのように捉えられた人々
- 独立 = エリートが指導→必然的に植民地全体を一つの単位と考える→恣意的にひかれた植民地の境界線を守ったまま独立を試みる→植民地の自決

## 参考文献

- 吉岡政徳 『反・ポストコロニアル人類学』 風響社  
D.ローネン 『自決とは何か』 刀水書房

## 1 4 開発と人類学：近代化論と進化主義

### 1 4 - 1 開発理論の歴史

#### ○近代化論

##### ○ロストウの近代化論（1950年代）

○伝統社会→離陸（農業主体から工業主体への自己転換）のための  
先行条件→離陸→成熟への前進→高度大衆消費時代

##### ○農業近代化論（1960年代）

○緑の革命：食料不足解消のためにアジア各地で行なわれる

○緑の革命の失敗

##### ○従属理論（1960年代～）：フランクの従属理論

○途上国は先進国の搾取によって、自国の自律的な成長を阻まれており、先進国が発展するにつれて途上国は後進性が進む→途上国は、「未開発」なのではなく「低開発」へと開発された

#### ○近代化論への反発

##### ○内発的発展論（1970年代）

○ベイシック・ヒューマン・ニーズの充足

○経済は複数の発展パターンがあるという認識

○地域経済の自立

○欧米中心主義から脱して、民族的個性を考える

##### ○持続可能な開発論（1980年代）

○経済成長路線が引き起こす環境破壊を問題にする

○環境との調和を図りながらの開発＝貧困撲滅を目指す

○下からの開発の必要性を訴える → 住民参加型開発の実践

### 1 4 - 2 開発論の性質

○進化主義的：新興独立国の人々を「近代化の遅れた、貧しい人々」「栄養状態の悪い人」と分類、「低開発という思想こそが、ある種の他者を作り、彼らを排除する可能性を持っている」

○「下からの開発」＝ 政府機関からの資金援助にたよる→開発プロジェクトで指導的役割を演じるのは援助機関の側

○参加型開発：住民の参加を促すのは、開発する側。一枚岩ではない人々のニーズをどう吸い上げるのか。開発する側の論理で「参加」を実施。→ 自文化中心主義的になる傾向

○エンパワーメントの思想：「させる」という意味合い。何に基づいてさせるか？ 介入者の価値観にそって「させる」。それは自文化中心主義

### 参考文献

青柳まちこ編 『開発の文化人類学』 古今書院

川田順造編 『開発と文化3 反開発の思想』 岩波書店

関根久雄 『開発と向き合う人々』 東洋出版

R.ノラン 『開発人類学』 古今書院

## 1 5 地球温暖化と海面上昇

### 1 5 - 1 人為的温暖化論

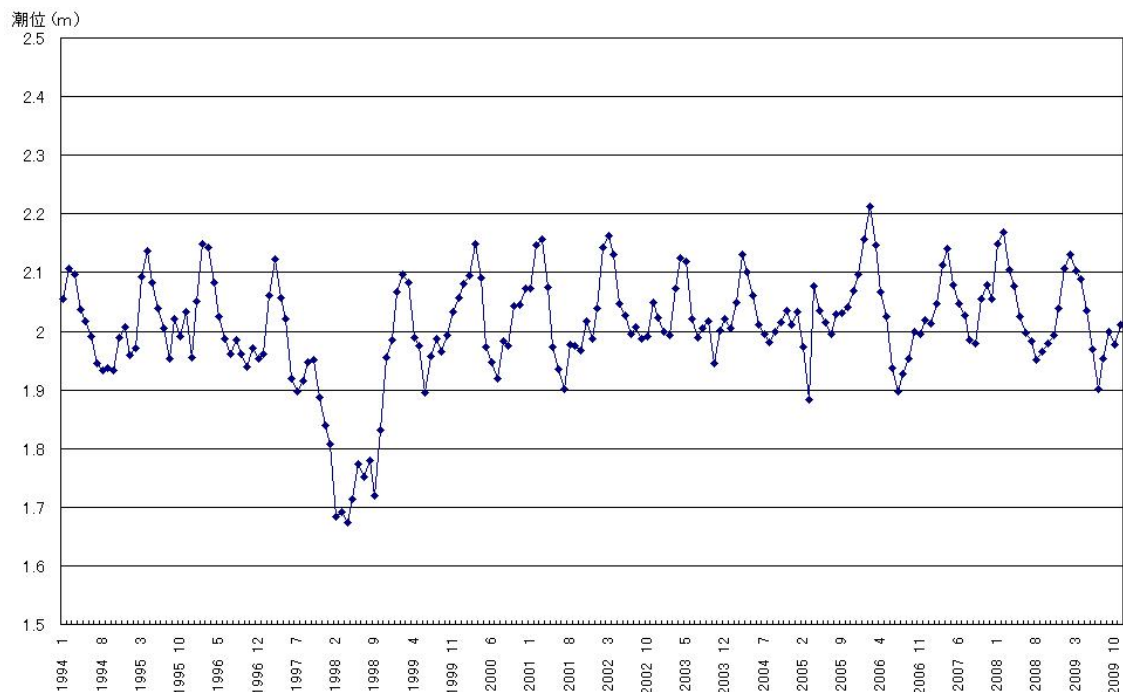
- 1995年 IPCC（気候変動に関する政府間パネル）第二次報告書  
人為的地球温暖化説に確信
- 1997年 京都議定書（地球温暖化防止京都会議）温室効果ガス削減目標を定める
- 2006年 アル・ゴアの『不都合な真実』
- 2007年 IPCC 第四次報告書
- 2007年度 アル・ゴアと IPCC ノーベル平和賞受賞
- 2009年 気候変動ポツダム研究所 気候変動に関する科学者会議
- 2013年 第五次報告書

### 1 5 - 2 島嶼国ツバルの動き

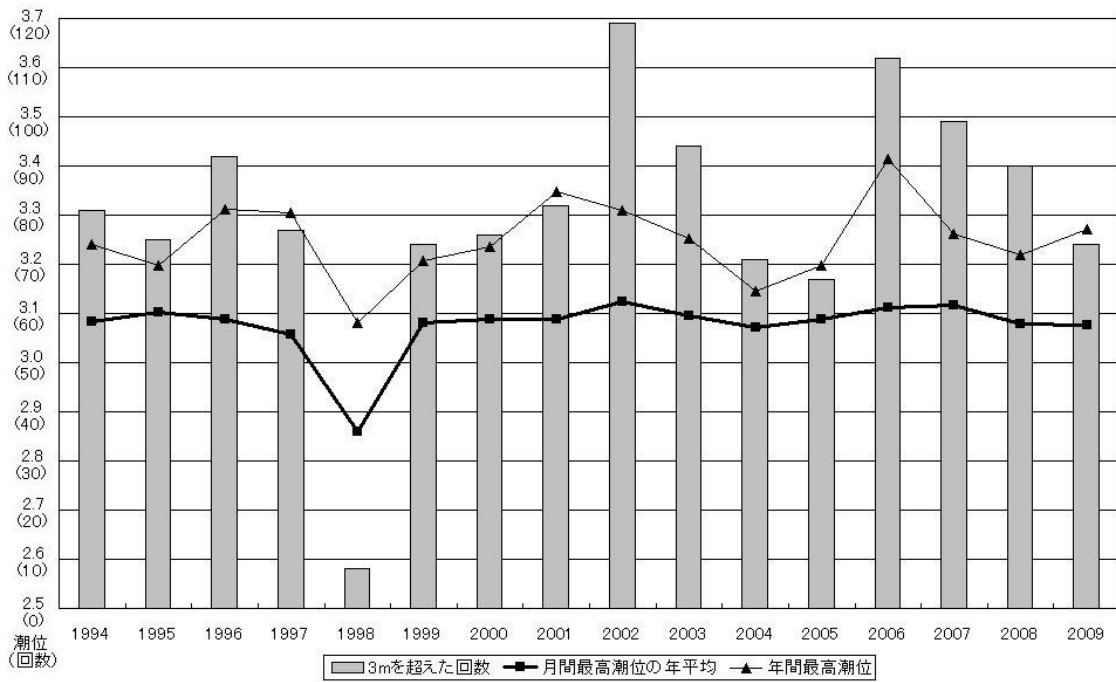
- 2000年 環境難民の受け入れ要請。
- 2002年 BBC 放送「ツバルは大国を国際裁判所に提訴する」という報道

### 1 5 - 3 ツバルの真実

- 現実： 1 海水浸水 2 沖合いの小島の消失 3 海岸侵食
- オーストラリア国立潮位センターのデータ







○2007 山野 et. al. Atoll island vulnerability to flooding and inundation revealed by historical reconstruction: Fongafale Islet, Funafuti Atoll, Tuvalu. *Global and Planetary Change* 57:407-416.

